

『 剣 道 の 心 』

北海道

真駒内少年剣道会

小学5年 千 田 緯 和

ぼくは剣道を七年間やってきて、いろいろな感情と出会ってきた。例えば「うれしい」だったら、一本とった時や勝った時、自分のコンディションが良かった時などだ。しかし、勝ち負け表裏一体の剣道、うれしいことが続くことはまず、ない。いつも「うれしい」の裏にあるのは「悲しみ」そして「敗北」だ。

剣道人生はいつも壁がつかまとう。どんなに強い人でも壁はあると思う。それをどうのりこえるかが「正しく、早く、強く」なるか、そうではない方向へ行くかの別れ道だ。その壁をのりこえて行く時にある感情が「苦しみ」だ。弱い自分、強い相手、戦うたびに自分と向き合わなくてはならない。逃げだせない。そんな気持ちを持ちながら、時に親や先生にアドバイスやはげましなどの支えをもらいのりこえる。だがやはり、自分自身の力で辛さをのりこえた時達成感やうれしさを強く実感することができる。

他にもいろいろな感情がある。例えば、試合中だったら「あせり」が多い。勝ちたいという気持ちが先立ちそれが原因であせりにつながってしまう。そうして冷せいにならないと応じ技を打たれてしまったり、面をはずしてしまうことが多くなる。そんな時、相手にさせてしまうのが「いたい」思いだ。あせって胴をはずしてしまったり、小手をはずしたりと様々だ。だからといって逆に自分がはずされることを「おそれ」てはいけない。おそれてしまうと面を打った後、ちじこまったり、すぐに守ってしまうのだ。

けい古試合の場合は「楽しい」という気持ちが強くなる。楽しすぎると時間が短く感じる。楽しさが続くうちに、ついには「無心」じょうたいになることもある。この「無心」の時に、一本をとると気分は最高調。でもそんなことを考えているうちに一本とられてしまったりする。ちらりと見える、肩を落とした母の姿。そんな時楽しい気分は小さくなり、自分の弱さを痛感する。

また別の日には、「がむしゃら」な気持ち。たいていこういう日はコンディションが悪く冷せいにならないと勝てないことに気づく。

そんな毎日の感情にふりまわされているが、「いつも無心の状態で剣道をする」ことが出来れば「あせり」も「おそれ」も「がむしゃらさ」も「うれしさ」も消えて、一番よい気持ちで剣道ができるのではないかと思う。

剣豪、宮本武蔵が書いた五輪書には、こう書かれている。

「一、兵法心持の事

兵の道において、心の持様は、常の心にかはることなかれ常にも、兵法の時にも少もかはらずして、心を広く直にしきつくひっぱらず少もたらず、心のかたよらぬうちに、心を

置いて、心を静にゆるがせて、きゆるぎの刹那もゆるぎやまぬうちに能々吟味すべし。小身なるものは、心に大き成事を残らず知り、大身なるものは、心に細かきことをよく知りて大身も小身も心を直にして我身の最弱をさせざる様に心持ち肝要なり。」

これを現代の言葉になおすと「兵法の道において、心の持ち方は常に平常心である。平時も戦う時も少も変わることなく、心を広くすなおに持ち、かたくならず、ゆるませず執着せずに心を落ちつかせ静かにはたらかせ、その一瞬も止まることがないよう心得よ。身体が小さい人は心を大きく持ち、身体の高い人は細やかな心持ちを忘れず、身体の状態にかかわらず、心をすなおにして楽な方にながれないように心がけることがかんじんだ。」

きっと昔の侍も、そしてぼくの先ばい達も先生達も、たくさんの感情という波にのまれながらも強くなっていったんだと思う。今はまだ感情にゆさぶられる毎日だけど、いつか武蔵や先生のように無心で剣道ができるようになりたいと思う。